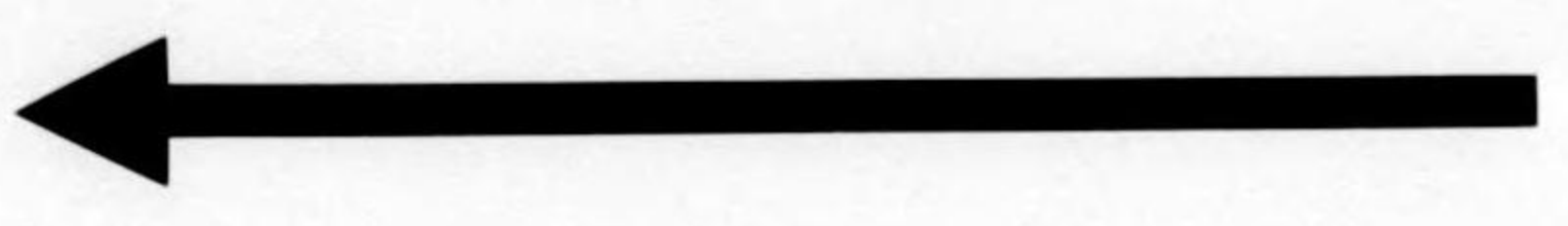


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



東洋美術大観十四

東洋美術大觀第十四册

支那彫刻之部

目次

齊周兩代の彫塑	十三	第百十圖	觀音石像
隋代の彫塑	十四	第百十一圖	觀音石像
唐代の佛像	十六	第百十二圖	觀音玉石像
唐代の道像	廿一	第百十三圖	觀音倚像
陵墓の儀飾及碑碣	廿二	第百十四圖	四神十二辰鏡
唐俑	廿三	第百十五圖	四獸鏡
唐鏡	廿五	第百十六圖	鳥獸花文鏡
第百一圖	河清元年造坐佛三尊石像	第百十七圖	龍門鑼鼓洞本尊左挾侍菩薩像
第百二圖	建德元年造坐佛三尊玉石像	第百十八圖	龍門鑼鼓洞本尊右挾侍菩薩像
第百三圖	武平三年造立佛三尊銅像	第百十九圖	龍門奉先寺虛舍那佛左方挾侍菩薩像
第百四圖	武平十年造坐佛三尊銅像	第百廿圖	龍門奉先寺左方天王像
第百五圖	十一面觀音軀像	第百廿一圖	龍門奉先寺左方金剛像
第百六圖	文殊軀像	第百廿二圖	龍門智運洞諸像
第百七圖	普賢軀像	第百廿三圖	龍門智運洞口獅子
第百八圖	天和三年造老君石像	第百廿四圖	伊闕香山寺第一洞佛像
第百九圖	開皇三年造觀音石像	第百廿五圖	伊闕香山寺第二洞佛像
		第百廿六圖	伊闕香山寺第二洞挾侍菩薩像



第百廿七圖 燉煌千佛巖菩薩聖像
 第百廿八圖 燉煌千佛巖聲聞聖像
 第百廿九圖 貞觀十三年中書舍人馬周造佛青石像
 第百卅圖 總章元年造彌陀佛像
 第百卅一圖 咸亨三年造彌陀石像
 第百卅二圖 咸亨四年造二級石龕像
 第百卅三圖 儀鳳三年造彌陀五尊石像
 第百卅四圖 雍州同官縣武定村碑像
 第百卅五圖 神龍元年造彌陀石像
 第百卅六圖 景龍二年造彌勒三尊白玉石像
 第百卅七圖 長安三年高延貴造彌陀三尊石像
 第百卅八圖 長安三年章均造坐佛三尊石像
 第百卅九圖 長安三年蕭元春造彌勒三尊石像
 第百四十圖 長安三年李承嗣造彌陀三尊石像
 第百四十一圖 長安三年德感造十一面觀音石像
 第百四十二圖 長安四年姚元景造彌勒三尊石像
 第百四十三圖 十一面觀音石像
 第百四十四圖 十一面觀音石像
 第百四十五圖 十一面觀音石像
 第百四十六圖 開元十二年揚思岳造坐佛三尊石像

第百四十七圖 馮鳳翼等造坐佛三尊石像
 第百四十八圖 坐佛三尊石像
 第百四十九圖 倚佛三尊石像
 第百五十圖 寶冠彌陀三尊石像
 第百五十一圖 坐佛石像
 第百五十二圖 坐佛白玉石像
 第百五十三圖 地藏白玉石像
 第百五十四圖 坐佛白玉石像
 第百五十五圖 釋迦白玉石像
 第百五十六圖 釋迦石像
 第百五十七圖 菩薩白玉石像
 第百五十八圖 彌陀利土檀龕
 第百五十九圖 業用虛空藏菩薩木像
 第百六十圖 金剛虛空藏菩薩木像
 第百六十一圖 千佛寺千佛龕像
 第百六十二圖 印度佛龕像
 第百六十三圖 坐佛雙塔龕像
 第百六十四圖 羅漢龕像
 第百六十五圖 地藏龕像
 第百六十六圖 觀音龕像

第百六十七圖 坐佛龕像
 第百六十八圖 立佛及化佛龕像
 第百六十九圖 倚佛三尊龕像
 第百七十圖 乾封三年造天尊石像
 第百七十一圖 弘道二年造天尊碑像
 第百七十二圖 開元十三年造天尊石像
 第百七十三圖 天寶九載造天尊石像
 第百七十四圖 武氏順陵石獅子
 第百七十五圖 武氏順陵石獅子
 第百七十六圖 美人彈阮咸白玉石像
 第百七十七圖 左監門大將軍樊興碑
 第百七十八圖 大唐三藏聖教序碑頭
 第百七十九圖 大秦景教流行中國碑
 第百八十圖 立人俑
 第百八十一圖 文官俑
 第百八十二圖 武人俑
 第百八十三圖 立人俑
 第百八十四圖 立人俑
 第百八十五圖 立女俑
 第百八十六圖 立女俑

第百八十七圖 立女俑
 第百八十八圖 立女俑
 第百八十九圖 立女俑
 第百九十圖 立女俑
 第百九十一圖 立女俑
 第百九十二圖 辟邪俑
 第百九十三圖 駝俑
 第百九十四圖 胡人俑
 第百九十五圖 馬俑
 第百九十六圖 胡人俑
 第百九十七圖 騎馬人物俑
 第百九十八圖 馬俑
 第百九十九圖 鞍馬俑
 第二百圖 明器駕牛
 第二百零一圖 十二辰牛俑
 第二百零二圖 犬俑
 第二百零三圖 豕俑
 第二百零四圖 羊俑
 第二百零五圖 兔俑
 第二百零六圖 鳥獸蒲萄背圓鏡

- 第二百七圖 鳥獸蒲萄背圓鏡
- 第二百八圖 十二辰背圓鏡
- 第二百九圖 鳥花背圓鏡
- 第二百十圖 鳥獸花背八角鏡
- 第二百十一圖 鳥獸背圓鏡
- 第二百十二圖 月桂背八角鏡

東洋美術大觀

支那彫刻之部 承前

齊周兩代の彫塑

高齊は東魏の後を受けて亦都に都し、文宣帝大いに佛寺を起し、僧尼諸州に滿ち、供養行道相續いて絶えず、佛像造立の盛なること寧ろ東魏に過ぐるものあり、窟窟摩崖の造像所々に鑿造せられき、その最も著れたるを龍門の藥方洞とす、藥方洞は古陽洞の北に在り、五尊一具の本尊の外、窟壁上に滿てり、武平六年都邑師道興の造像記に依りて鑿造の年代を考ふることを得、鞏縣の石窟、太原諸寺の石室亦皆造らる、惟ふにこれ等の諸窟窟像は即ち石窟丞の營管する所なりしならむ、窟窟以外の石像も今に存するもの極めて多く、その銘刻皆以て徵すべし、造像の尊種は元魏の世彌勒最も多かりしが、高齊に至りては盧舍那佛の造立最も多く、觀音彌勒釋迦これに次ぐ、信仰の變遷亦以て考ふるに足れり、彌陀挾侍の菩薩名を觀音、勢至とし、釋迦の挾侍を藥王、藥上の二菩薩と爲せる明徵も、齊代に至りて始めてこれを見る、雙觀音又は雙彌勒とて、一座の上に一光又は雙光の兩尊を造ること、亦特に高齊に行はれたる像式なり、石像の材に就いて美石を用ゐ、殊に玉石を賞用せしことも齊世を以て最と爲す、碑像の最盛も亦齊代に在り、天保八年の劉碑造像碑、河清三年の在孫寺造像碑、及水寧寺造像碑、天統三年韓永義等、同五年兩赤齊、武平元年馮暉寶の造像碑、同三年の興聖寺四面像碑、等當時の遺品今に少からず、武平四年臨淮王の碑像、同五年兩赤齊、武平元年馮暉寶の造像碑、同三年の興聖寺四面像碑、はれ、更に六面八面の石柱像あり、各面層々に窟を設けて佛像を彫出せり、技術の様式は概して東魏の餘波に屬す、今高齊石佛像の一例として、河清元年七月廿三日陳海榮所造の一軀像を掲ぐ、前出龍門蓮花洞南壁にも天保八年所造の釋迦像あり、參看すべし、高齊と同時に宇文周あり、西魏の後を受けて長安に都す、西魏由來造像の盛ならざりしこと、宇文周の佛教像設從ひて高齊に及ばず、加ふるに建徳の滅法ありて、前代の佛像毀拆せられしもの、その數を知らざりしかば、遺品亦多からず、摩崖像には僅に四川簡州の大佛崖、秦州の麥積崖あるのみ、然れども碑像等の流行及像式は略高齊に同じ、今周代石佛像の一例として、建徳元年八月卅日比丘惠瓌等所造の玉石像一軀を掲ぐ、これと様式を同うせる無銘の石佛坐像も、周代遺品の一なるべし、金銅像も亦齊に盛にして、周に微なり、小像の高齊の年號あるもの少からず、就中觀音像最も多し、面貌衣褶の様式は石像に同じく、光背の



蓮瓣形一種の特徴あり、こゝに武平三年比丘惠榮所造の立佛三尊像^{三〇}及武平十年所造の坐佛三尊像^{三一}を掲げて齊代金像作風の鑿
質に資す。

瓦瓶の佛像は周に至りて瓶塔の史徴あるに考へ、その製作の始めて起りしことを知るべし、近年長安出土の瓶像中、往々周代の物と思は
るゝものあり、本書收むる所の十一面觀音及文殊普賢の三軀^{三二}の如きは即ちこれなり、共にその天蓋の形式の元魏の遺風に屬す
ることは、古陽洞等魏世の諸像に依りてこれを考ふることを得べく、隋唐に見ざる所のものたり、而して十一面觀音法は宇文周の耶舍
多が譯したる神咒經を以て初出す、以てこの像の周代の遺品なること殆ど疑なきを知るべし。

道教の像設は齊周共に頗る行はれたり、齊に在りては姜纂、孟阿妃、馬天祥等の造像銘風に金石の書に著れ、周は皇帝受籙の事元魏太武の
舊に依りし程なれば、道像は却りて齊より盛なりしもの、如し本書載する所の老君像^{三三}は周天和三年の所造に係り、前に三脚の挾軾
を置き、左手をこれに凭せ、右手に符を執りて坐し、左右の二真人笏を持ちて立ち、趺石に香爐及道民供養の像を刻せり、惟ふにこの像式は
齊周の世に至りて始めて始めてその典型の成立せしものなるべく、隋唐の諸像多くは皆これに倣へり、甄鸞の笑道論の如きは、偶周世道教の盛
を反徴するに足る、これに依るに、當時道像の挾侍一を金剛藏一を觀音と曰ひきと見ゆ、由來佛像の摸擬に出でし事とて、復怪むを須るざ
るなり。

齊周兩代に於ける佛道以外の彫刻には、周に西域諸國の樂舞を傳へて、その龜茲樂に獅子あり、武帝齊を平け、城舞を作りて皆木面を用ひ、
齊に蘭陵王入陣曲起りて亦代面を用ひしこと等の徴すべきあるに過ぎず、獅子の木頭及陵王面は我が國の傳ふる所に依りて、その舊態
を想像するに難からざるなり。

隋代の彫塑

隋の文帝深く佛教を信じ、周武滅法の慘迹を慨し、詔して形像を尊敬せしめ、碎身遺影皆有司に命じて莊嚴せしむ、故像を修治すること百
五十萬、八千九百四十餘軀、新に金銀檀香夾紵牙石の像を造ること大小十萬六千五百八十軀、加ふるに法を設けて佛天の像を毀壞偷盜す
る者は不道を以て論じ、沙門道士のこの罪を犯せる者は惡逆を以て論ぜしめ、又民に令して、戸毎に錢を出して經像を建立せしむ、民間の佛
經六藝の籍よりも多し、これより佛像の設供は寺院の外、普く庶民の家に、行はれ、開皇仁壽の間、造像の盛なること、前古に比なし、煬帝も亦
多く佛寺を建て、故像一十萬一千軀を修治し、新像三千八百五十軀を造立せられき、されば彫像の名手の印度より來れるもあり、開皇間の
匠人婆羅門僧眞達その名を今に傳ふ、遺品存するもの亦少からず、窟崖の諸像中、龍門には僅に伊闕佛龕碑傍の開皇十五年所造の阿彌陀

及賓陽南洞北壁の大業十二年所造の觀音像^{三四}等あるに過ぎず、雖も山東歷城には千佛山玉函山及佛峪の諸龕あり、益都には雲門山
馳山の諸龕あり、東平には白佛山の摩崖あり、長清には五峰山蓮花洞あり、その餘直隸には磁州の南響堂山摩崖及曲陽の黃山龕あり、河南
には安陽の萬佛溝洞あり、像銘皆明に隋代の作たることを徴するを得、窟崖像の普及隆興に驚くべし、こゝを爲す個々の石像に至りては、遺
作の傳世夥多なること寧ろ魏齊に過ぎたり、こゝに開皇二十年二月八日所造の玉石觀音像^{三五}を掲げて、作風の一斑を示す、無銘の觀音
立像三軀^{三六}、倚像一軀^{三七}の如きも、嚴身の粗綽はあれど、像式略相同じ、蓋し皆隋朝の製す、玉石像四面像、碑像及石天宮、石浮圖
等の流行は依然として前代の如く、殊に玉石像には頗る大像あり、塑像夾紵像檀像等の盛に造られしことも、茲に史傳に考ふべし、像の尊
種は觀音最も多し、佛像の印相も、定印は尙間兩手を前後に重ねし、こゝ千佛山の龕像に見るが如く、なれど、既にこれを上下に重ねた
る後世普通の定式に爲すに至りぬ、雲門山及五峰山蓮花洞の諸像以てこれを徴すべし、觸地印及說法手も亦漸く後世普通の印相に同じ
きを見る、こゝ、馳山の龕像の如く、如來の頂相は螺髮漸く多し、衣態も佛像の内衣を胸前に帶結せるもの、及左肩より懸れる紐に吊れて袈
裟の裏反りたる形の如きも、隋に至りて始めて出て來れり、並にこれを千佛山、雲門山、馳山、五峰山等の諸像に見るべし、技術の様式も從ひ
て變化し、元魏の遺風は既に全く迹を絶ち、面貌益温潤満ち、爲り、衣褶の彫法も寫實の巧大いに進み、安帖流麗の美を加へ、座前垂下の
皺襞復齊周の諸像と同じからず、菩薩像も天衣の垂襖、裙褶と相和して頗る流暢なり、唐式の早く既に隋代に胚胎せるを認む、こゝに於い
て我が國古代の彫刻を顧みるに、これ等の諸像と年代を同じうする推古天皇時代の像式は、東魏高齊の典型を傳へたるものなること、先
にその相似を説けるが如く、却りてその隋式に非ざるを知るべし、惟ふに最初我が國には三尊より傳へたるにて、三尊は隋代尙魏齊の舊
式に依りしが爲なるべし、飛鳥時代に至りては、直接唐と交通してその風を傳へ、謂はゆる隋式は終に始と我が國に行はれずして止みし
なり。

金銅小像の遺品は隋代の物最も多し、これ即ち先に述べたる民家像設普及の致す所に外ならず、さればその像式も從ひて變化し、種々の
新様を生じぬ、光頂の化佛漸く廢れて、寶珠形蓮瓣形、三尖形等の光背最も行はれ、挾侍の菩薩を著くるに、花莖を以て本尊の座邊に挿入し、
又は別に挾侍化生等を作りてこれを列べ、或は五尊、七尊を一具に作り、背に菩提樹を添へ、或は三尊の座を連ね、觀音の像式も曲腰に一種
婉巧の形態を生ぜり、この種の鑄像の盛に行はるゝや、皇家の願造等には往々銀像、黄金像あり、石作に四面像行はるれば、銅像にも亦四面
像造られき、而してこれ等の金像の銘は、古來皆その跣座又は光背に刻するを常とせしが、隋に至りては造寺造像の石碑に倣ひ、螭首龜趺
の小銅碑を作りて像背に著くること出で來ぬ、皆これ鑄像の隆興に伴へる變遷なり。

近年支那より傳へたる金石諸像の外、隋代に當りて日本に將來せられし金像少からざりき、法隆寺の寶物たりし謂はゆる四十八體佛の

如きは悉く日本の製作にはあらで、その中恐らくは當時三韓を經、或は直ちに隋より傳へしものあらむ、その外にも推古朝の像と稱せらるゝもの、中亦多少支那作あるべし、今にして彼我の所作を區別せむは極めて難事なれど、盡くは日本作に非ざるべしとの推想は具眼者の同じく首肯する所なり、その様式日本作たること、明徴ある像に見ざる所のもの少からざるは、即ちこれが爲のみ要するに支那彫塑史の研究には、これを參合せざるべからざること言ふを須るべし。

鎚鏤像は我が國の謂はゆる押出佛なり、東晉太和中沙門竺道壹金鏤の千像を造り、劉宋元徽中沙門法獻龜茲國に至り、金鎚鏤像を造りて齋し歸りしを以て、その文獻の最も古きものとす、その後絶えて史徴を得ず、又曾て支那にその遺品あることを聞かず、雖も元魏、齊周を経て隋唐に至るまでも盛に作られけむことは、亦我が國にその照映を見るに由りて知らる、小聖田、飛鳥、奈良朝の際、我が國にても製作せられ、正倉院にはその壯麗かと思はるゝ物もありて、遺品も少からず、こも亦その中に或は支那製なきを保せざるなり、故を以て支那鎚鏤像の事を考ふるには亦參照の必要あることを忘るべからず、たゞ鑄像よりも一層彼我の識別に困難なるのみ。

文帝は佛法を雅信し、道士に於いて蔑如たりきと雖も、開皇二十年の像設保護の法律は、均しく道像にも及ばし、ことごとく、金石の遺作亦少からず、像式概して齊周に同じ。

佛道以外の彫刻には、閩、毗、何、通等の名匠あり、何通の子何稠將作大匠たり、綠、瑩を以て琉璃に擬すと言へば、綠、瑩は隋世既にこれ有りしなり、されば近年出土の明器中見る所の綠、瑩、壺、套の屬には、或は隋代の物あらむ、浮彫の獸帶類る巧妙なり、又隋の遺作と思はるゝものに、鏡背の鑄飾あり、本書收載する所の四神十二長鏡、十四獸鏡、及鳥獸花文鏡の如きは、前出の漢晉諸鏡及後出の唐鏡と對照して、正に隋器なるべきことを識るに難からず。

唐代の佛像

李唐一代二百八十九年、劉漢の後、世代の久しきこと、これに及ぶものなく、初唐の世國運の隆盛前古に絶し、盛唐に至りて文物益、繁然たり、惜むらくは肅宗の朝安史の亂後、河朔朝命に抗し、藩鎮黨援跋扈して復租を納れず、吐蕃、回紇、南詔の胡虜疊に乘じて邊陲を隔れ、德宗の世田悅、李納等先後反する者絶えず、奉天の一詔稍天下の心を得たりと雖も、開架除陌の稅錢に民益困弊す、憲宗の初賢相位に在り、雖も元和の政終に非なり、晚唐に至りては天下の事皆北司に決し、朋黨相闘き、その末豪傑競ひ起りて、以て終に五季の大亂を致す、貞觀、開天の盛終に再び見るこゝ能はざりき、を以て佛敎の像設も初盛唐を以てその盛時とし、中晚唐に至りては甚しく衰頽せり、國運の盛衰の藝術の消長に關すること眞に著明なりと謂ふべし、されば支那古代の佛像史は元魏の太和、景明以來、李唐の開元、天寶に至る二百七八十

年間を以てその正紀と爲す、今先史傳に依りてその文獻を尋ぬるに、高祖武德七年傳、上疏して釋敎を除去せむことを請ひて曰はく、天下の僧尼數十萬に盈つ、緇絲を剪刻し、泥人を裝束して厭魅を爲し、萬姓を迷惑す、隋朝以來遺像の盛なりしこと、以て察すべし、されば九年五月詔して京師に寺三所、觀二所を留め、其餘天下諸州に各一所を留め、餘は悉くこれを罷めしむ、雖も、事竟に行はれず、太宗貞觀二年詔して建義已來交兵の處、義士勇夫を身を戎陣に殞せる者の爲に各一寺を立て、文臣をして碑銘を爲りて功業を紀せしむ、盛大なる造像多かりしや必せり、貞觀十九年、玄奘三藏印度より歸る、齋所の銀像、金像、檀像七軀あり、これを弘福寺に安置し、後詔して大慈恩寺を建て、これを移す、遂像の盛儀言語に絶せり、貞觀廿二年、使人王玄策亦印度より歸る、その一行中巧匠宋法智と云ふ者あり、塑工に長じ、摩揭陀の佛足跡及菩提樹伽藍の彌勒像等を圖寫して歸る、巧に聖容を窮め、未だ京に到らざるに道俗競ひてこれを摸す、印度像式の影響顯著なること蓋しこれ等に由るならむ、太宗嘗て敎を下して佛像を賣ることを禁ず、その文中に、伎巧の家多く造鑄あり、供養の人競ひ來りて買贖すと言へり、當時佛像製作出售の狀を考ふるに足る、高宗顯慶元年、河東郡夫人の戒を受くるや、勅して玄奘三藏及大德九人を鶴林寺に迎へ、授戒了りて後、巧工吳智敏に命じて十師の形を圖し、留めて供養せしむ、吳智敏は宋法智に次いで名を史傳に留めたる彫塑家なり、特に肖像に長じたりと見ゆ、聖士安生も亦高宗朝の名匠なり、僧法雲の五臺山菩薩頂に文殊眞容院を建つるや、安生法雲と共に懇禱し、光中に文殊の儀容を見て圖模、塑成す、乾封二年、道宣律師化す、高宗道風を追仰し、詔を下してその眞容を崇飾、圖寫せしむ、相匠韓伯通これを塑績す、相匠と言へば殊に傳神の妙手なりしならむ、長安大雲經寺の塔は、隋の鄭法輪等の畫跡及韓伯通塑作の佛像あるを以て、三絶塔と稱せらる、伯通塑技の妙想ひ見るべし、睿宗先天元年、慧能大師新州國恩寺に報恩塔を建つ時、蜀僧方辯と云ふ者あり、來りて師に謁して曰はく、捏塑を善くす、師色を正して曰はく、試に塑し看よ、方辯その旨を領せず、乃ち師の眞を塑す、高さ七寸許、曲きにその妙を盡す、師これを觀て曰はく、汝塑を善くして佛性を善くせず、酬ゆるに衣物を以てす、方辯禮謝して去る、當時造像隆興して、僧中塑造を善くする者ありしを見るべし、方辯は蓋しその秀でたる者にして、慧能の禪には徹せざりしかど、塑工の名手として傳ふべきなり、開元、天寶の際、道佛二敎の盛に伴ひ、彫塑の妙工輩出す、その最も著れたる大家を塑像家楊惠之とす、開元中、吳道子と同じく、梁の張僧繇の筆迹を師として、畫友たり、巧藝並に著る、然るに道子は東洛に浪迹せる時、幸に明皇に知られ、召し入れられて、内供奉と爲り、聲光獨り顯る、こゝに於いて惠之、毅然として忿を發し、都へて筆硯を焚いて、専ら塑作を肆にし、能く僧繇の畫相を奪ふ、乃ち天下の第一手として、道子と衡を争ふに至る、時人語りて曰はく、道子の畫、惠之の塑、奪ひ得たり、僧繇の神筆路と、その世に稱歎せらるゝやかくの如し、而して惠之の畫亦頗る巧妙なりしこと、はその千福寺東塔院の壁畫涅槃及鬼神圖の張彦遠の名畫記に録せられたるにても考へらる、崑山慧聚寺に惠之の塑する所の毘沙門天王及二侍女あり、形模生けるが如し、惠之又八萬四千手の觀音を爲るに、手を措くべからざるを以て、千手眼を作る、後のこれを作る者皆

惠之を法とす嘗て義淨三藏土を呪し惠之これを塑して楞伽山を造る一切の諸蟲獸敢て至らずと云ふ臨潼の福嚴寺は開元中華清宮の餘材を以て修築せる寺にてその佛殿の塑像は皆惠之の作る所なりと云ふ同殿に又玉石像あり天寶七載玄宗皇帝華清宮の朝元閣に降見せるを以て勅して開南に降聖觀を立て幽州の白玉石を琢して老君像を造る福嚴寺佛殿の像と共に成る作者を元伽兒と云ふ同佛殿に又聖脫空像あり亦伽兒の作る所惠之の作と共に能妙織麗曠古備なしと稱せらる惠之伽兒と同時に員名程進の二家あり張彥遠曰く惠之は聖造を善くし員名程進は石像を彫刻す並に畫述も亦皆精妙なりと又張愛兒と云ふ者あり畫を吳道子に學びて成らず便ち捏塑を事とす明皇御筆を下してその名を仙喬と改む雜書畫像亦妙に至る吳道子も亦時に塑作を爲しき東京相國寺の文殊維摩は道子の裝塑と傳へたりさればその弟子にも塑作に長じたる者獨り張仙喬のみならず西京菩提寺東門の聖神は吳生の弟子王耐兒の工なりき光明寺に鬼子母及文惠太子の聖像あり舉止態度生けるが如しその工名を李岫と云ふ成都寶相寺偏院小殿の中に菩提像あり織麗凝らず新に塑するもの、如し初め造る時匠人依明堂まづ五臟を具し次に四肢百節を作る李岫依明堂も亦共に盛唐の名工なり天寶十二載西番諸國の兵涼州を侵しその城を圍む玄宗不空三藏に勅して祈らしむ帝香爐を乘りて側在り不空誦咒二七遍忽ち神兵の甲を帯び戈を荷ひて道場の前に現る、あり帝不空に問ふこれ何の神ぞ不空對へて曰はく北方毘沙門天王の第二子獨健なり天兵を領し請に應じて敵に赴く故に來り辭するのみと既にして西涼奏す神兵城の東北雲中に現じ敵兵畏懼して皆退き城北門樓上に毘沙門天王の形像を光明を放つその天王神像表に附して進上す帝因りて勅を諸道の節鎮所在の州府に下し各城の西北隅に於いて毘沙門天王の形像を安置せしめ又佛寺をして別院に天王像を安置せしむこれよりして毘沙門の像設天下に普く唐末五季に至るも造立頗る行はる大曆四年不空の奏に依り勅して天下佛寺食堂中寶頭盧尊者の上に文殊像を置いて上座と爲さしむ印度及西域大乘僧伽藍の風を取れるなりこの像は謂はゆる聖僧文殊にして菩薩形には非ず同七年又不空の奏に依り勅して京城及天下僧尼寺内に各一勝處を揀び文殊菩薩像を置かしめ州府の長官に命じて修葺し文殊像を塑して裝飾綵畫し功畢れば各畫圖を具して奏聞せしむこゝに於いて文殊菩薩の像設亦天下に備し武宗會昌五年勅して天下の佛寺を廢す毀拆する所の寺四千六百餘所還俗する所の僧尼廿六萬五百人寺材は以て驛驛に用ゐる金銀の像は度支に付し鐵像は以て農器を鑄銅像鐘磬は以て錢を造らしむこれを會昌の滅法とす大滅法の第三回なりこの時御史を分遣して天下の廢すべき寺を檢し金銀の佛像を收録す蘇監察と云ふ者あり兩街の諸寺を巡視し銀佛の一尺已下なるものを見れば多くこれを神として歸す人これを蘇社佛と云ふさればこの時官吏の奉佛に依り又は藏匿の爲に難を免れし金像も少からざりしならむ大中二年佛法を復し懿宗奉佛時に眞檀像一千軀を造りしこと等あれど遺像の盛は終に再び舊時に復するに及ばずして止みき洞窟摩崖の遺像も唐に至りて亦極めて盛なり龍門の龕窟は隋代遺像極めて寥々たりしが初唐の世再び魏齊に譲らざる隆興を致せ

りその中在來の洞窟に龕像を彫出せるは實陽南洞を主とす前出同洞北壁圖六四中に見ゆる貞觀廿二年思順坊老幼等所造の彌勒像の如きは即ちその一なり古陽洞藥方洞等にも亦初唐の遺像あり新に鑿造せられたる洞窟は先實陽北洞の北に鐘鼓洞ありこれ蓋し太宗の第四子魏王泰がその母文德順皇后長孫氏の爲に造る所にして即ち實陽洞外に刻したる伊闕佛龕碑はこの洞の鑿造と實陽洞修補との事を録したるものに外ならず宋の歐陽修以來この碑を以て實陽洞鑿造の碑と爲すと雖も實陽三洞は元魏の所造なること先に述べたる所の如くなれば魏王の新造は鐘鼓の一洞のみなること明なり洛陽縣志に旁に飛泉ありて風激すれば即ち響應すと曰へり鐘鼓の名蓋しこれに本づく洞中の三尊及神王像その樣式實陽洞の元魏風と異なりて雄渾莊麗なる初唐の作風に成れり本書掲ぐる所左右の挾侍菩薩像四七以てこれを觀るべし伊闕佛龕碑は貞觀十五年に刻する所なればこの洞蓋し同年の所造ならむ蓮花洞の北王公路と刻したる石標ある所の一洞には永徽元年の遺像銘あれば洞亦高宗朝初の鑿造ならむ敬善寺龕亦同年代に成れり且見ゆ像銘の最も古きもの顯慶三年及五年あり紀國太妃韋氏の遺像も亦この龕に在り則天武后嘗て龍門に幸し群臣に命じて詩を賦せしめ先成る者に錦袍を賜ひ東方虬これを拜したるに宋之問の詩次いで成りその詞愈高かりしかば奪ひて之間に賜ふ蓋しこの敬善寺に於けりし事ならむ敬善寺は潛溪寺の南に在り龕淺くして大なれば東崖よりして望み見るべく昔はその前に屋宇を構築して寺を造りしなりこれ龕狀相似て更に大なるを奉先寺龕とす咸亨三年武皇后脂粉錢二萬貫を賜ひ西京實際寺の善道禪師等をして檢校せしめ以てこの大龕舍那像龕を造り上元二年功畢る本尊像高八十五尺龕高百四十尺縱廣十二丈記文中に正教東流してより七百餘歲像龕の功德たゞこれを最と爲すと曰へるは實に誇張に非ざるなり規模の巨壯敬善寺も復及ばず寺閣の構築は僅にその材孔を存じて早く亡びぬと雖も像は略依然として儼存せり本尊盧舍那佛の左右に二菩薩四九二天王五〇二金剛五一あり壁上に又立佛の諸龕あり像式の壯麗眞に天下の偉觀たり張九齡の撰文に係る牛氏像龕碑及明皇御製の内侍高力士楊思勗等造像碑亦この龕に在り開元十三年明皇此行幸あり杜甫が奉先寺に遊ぶの詩以て當年の景勝を想像するに足る智運洞は沙門智運が永隆元年鑿造する所にして當陽坐佛五尊像の外後壁には化佛飛天を造り左右兩壁面に小佛一萬五千身を彫出せり五二洞頂天蓋の蓮花瓣に銘記を刻す本尊の華座頗る新式を出せり洞口に獅子五三あり智運洞下に又無名の一洞あり儀鳳三年の遺像銘あれば亦初唐の鑿造ならむ龍門山と相對する伊闕の東崖香山にも石窟あり神龍元年中宗香山寺に幸し李白楊巨源韋應物皆香山寺に遊ぶ詩あり白居易亦久しくこゝに寓す惟ふに香山寺石窟の鑿造は前諸洞より年代稍後れて初唐末乃至盛唐に在るべしその第一洞の佛像五四の寶冠を著けたるは蓋し盛唐の新像式なり第二洞の佛像五五及挾侍菩薩像五六亦皆然り並に前出の諸像と作風を異にす我が國奈良朝の作に比較して以てこれを識ることを得べし上述の外龍門の唐代遺像は銘記に依りて徵すべきも甚だ多しその中作者の名の知らるもの石作張珂及匠人張和あり龍

門の外河南には尙鞏縣の石窟寺安陽の萬佛溝孟縣の高徳崖等亦初盛唐の造像多し山東には歴城の千佛山及佛峪益都の彌山及雲門山東平の白佛山等前代に續きて造像絶えず更に寧陽の石門房山長清の靈巖寺等唐代新に興れる窟崖あり直隸には隋代に始まる南響堂山の唐に入りても造像少からざるのみならず同じ磁州の北響堂山及唐山の宣霧山は初唐に至りて摩崖の造像亦興り盛唐に至るまで銘記の微すべきもの極めて多したゞこれ等東方の諸窟崖は開天の交を以て終末とし爾後造像殆ど絶ゆこれに反して四川の諸崖は廣元の千佛崖を初めとし綿州簡州巴州資州南江大足等中唐晚唐に至りて造像却りて盛なり蓋し東方の流行漸く西邊に及ばしものかされば燧焯の千佛巖も隴西の李氏に依りて武周以後中晚唐益修造の盛を致せり並びに銘記碑文に微すべし西本願寺が燧焯より獲たる塑造像の菩薩七〇七及聲聞八〇七の二像は何れの洞より出でしやを知らずと雖も中晚唐の物なることはその作風に由りて考へらる窟崖以外の箇々の石像も唐代の遺作甚だ多し本書收載する所太宗朝の物には貞觀十三年中書舍人馬周所造の青石佛坐像九〇七あり高宗朝の物には總章元年所造の彌陀五尊交龍碑像九〇八咸亨三年所造の彌陀像九〇九同四年所造の二級龕像九一〇儀鳳三年所造の彌陀五尊像九一一及雍州同官縣武定村碑像九一二あり交龍碑像は李盛鐸氏の所藏と聞く武定村碑像は陝西三原學署衙門觀音廟に在り銘文年月を缺くと雖も同官縣の雍州に屬せるは貞觀十七年より天授二年まで及大足元年より先天元年までにて開元元年には雍州は京兆府と爲りしなればこの像の成る蓋し亦高宗朝に在り藝風堂金石目これを儀鳳三年と爲せるは舊拓又は側背の拓本に或は年月の微すべきものあるか中宗朝の物には神龍元年所藏の彌陀像九一三及景龍二年所藏の彌陀三尊白玉石像九一四あり後者は背に七佛の刻畫及銘記を彫し左側に多寶塔右側に藥師如來上面に花文を刻せりこれ等の外武周乃至開元の造像にして最も貴重なる遺品の我が國に傳はれるは西安寶慶寺壁間に在りし青石半出像十數軀の近年早崎天眞君に依りて將來せられたるものあり本書載する所高延貴所造の彌陀三尊像以下の十四軀即ちこれなりその中高延貴の彌陀九一五韋均の彌陀九一六蕭元春の彌陀九一七李承嗣の彌陀九一八及沙門德感の十一面觀音九一九は長安三年に成れりこの餘尙寶慶寺に遺れるもの王瑤所造の彌陀純崇所造の佛像ありて共に長安三年の所造たりこの七軀はその銘文より考へて光宅寺七寶臺の爲に造れるものなることを知る光宅寺は唐の皇城東光宅坊橫街の北に在りき武后こゝに七寶臺を置く臺甚だ高顯これに登れば四もに眼界を極む王瑤純崇はその名唐書に出づ沙門德感は高宗武后に敬重せられたる翻經の大徳にして七寶臺を造る檢校たりしことこの造像の銘にて知らる純元景所造の彌陀九二〇長安四年に成り光宅寺法堂の爲にその石柱に於いて作りしものなり元景は姚崇の兄にしてその名又唐書に見えたり德感の所造と酷似せる十一面觀音像の寶慶寺に在りしもの尙三軀九二一あり蓋し同じく長安前後の作ならむ皆端嚴流麗の美初唐藝術の好標本ならざるはなし開元十二年内侍魏國公楊思勳の新莊楊花臺の佛殿に造れる石佛二軀も寶慶寺に在りしもの亦共に早崎君の將來に係れりその一彌勒像下に序文を刻し他の一なる釋迦

像九二二の下には銘を刻せり内侍馮鳳翼等所造の釋迦像九二三は題名のみを刻して年月を缺くと雖もその銜名に依りて前二縣と略同年代の作なることを知ることも寶慶寺より傳へたるものにて蓋し亦楊花臺佛殿の爲に造られしものかこの餘尙寶慶寺所傳の無銘石像三軀ありその一菩提樹下の釋迦九二四及彌勒像九二五は共に前出長安開元の諸像に類したれば蓋し亦その頃の所造なるべく寶冠を著けたる彌陀像九二六は開元以後の制なるべし以上寶慶寺諸像の外我が國に流傳せる唐代の石像亦少からず坐佛白玉石像一軀九二七は先の神龍元年の彌陀に類し一軀九二八は座式頗る智運洞の本尊に類せり地藏菩薩像九二九亦然り佛坐像一軀九三〇は座式香山寺洞に似たり又石佛像にしてその背二扇の屏風の如く兩傍に挾侍又は供養者像の刻畫あるもの少からずこゝに掲ぐる二軀九三一は即ちこれなり後者は定印の上に鉢を持つ技術の様式は共に初唐に屬せり西安香城寺舊藏の菩薩坐像九三二の如きも亦盛唐の一遺品なるべし本像は唐代の遺作殆ど獨り我が國に傳存せり初唐の頃よりして檀龕寶相と稱し檀木もて龕と共に佛菩薩等の像を細彫せるもの頗る行はる乾封の遺文に盧照鄰の作れる相樂夫人檀龕寶相讚あり弘法大師將來の刻白檀佛菩薩尊像一龕九三三は即ち一の檀龕なり今俗に枕本尊と呼ばれて高野山金剛峰寺の國寶たり彌陀淨土の相を圖し挾侍菩薩聲聞獅子化生に至るまで細巧を極む同山普門院及嚴島神社の國寶にもこれに類したる檀龕あり共に亦弘法大師の將來と傳稱せり蓋し皆中唐頃の製作ならむ慈覺大師の請來品にも涅槃淨土西方淨土及僧伽誌公過廻三聖像の檀龕ありしかども今に存せざるを惜む慧運の請來に係る五大虚空藏菩薩像は東寺觀智院に在りこゝにその業用九三四金剛九三五の二軀を掲ぐ慧運は慈覺大師と共に大中元年の歸朝なればこの像蓋し中晚唐の作なり支那に殆ど絶無なる本像密教像の唐代遺品を我が國に見るは頗る珍重すべき快事なりとす

小銅像は唐に至りて復行はれず遺品甚だ稀なり然れども初唐の頃には前代の遺風として往々製作せられ小銅碑の傳世少からずこれに反して瓦甃像は唐に至りて最も盛なり謂はゆる善業泥は蓋し貞觀永徽頃の物なるべく又永徽己未僧法津が多寶佛六十八万座を造れるが如き皆これを遺品に徵することを得本書載する所の千佛九三六は背に印度佛像大唐蘇常侍等共作とありこれと同銘の甃像にして法津の多寶塔に酷似せなればこの甃像亦當年の物ならむ立佛九三七は背に印度佛像大唐蘇常侍等共作とありこれと同銘の甃像にして法津の多寶塔に酷似せるものあればこも亦永徽前後の作なるべし其餘坐佛雙塔九三八羅漢九三九地藏九四〇觀音九四一坐佛九四二立佛及化佛九四三倚佛三尊九四四等皆年代の明徴を缺くと雖も共に初盛唐の遺作なるべきことこれを我が橋寺岡寺等出土の甃像に對較して略これを考ふることを得べし

唐代の道像

第百圖 河清元年造坐佛三尊石像

高八寸九分

東京 墨田太久馬君藏

第一百一圖 建德元年造坐佛三尊玉石像

高一尺三寸九分

第一百二圖 坐佛石像

高一尺三寸



第一〇五号
第一〇五号 佛坐像 三尊 石造

第一〇六号
第一〇六号 佛坐像 石造

...

第三百三圖 武平三年造立佛三尊銅像

高八寸

東京 古河鹿之助君藏

第三百四圖 武平十年造坐佛三尊銅像

高四寸五分

橫濱 原 富太郎君藏

第三百六圖 文殊板像

真大

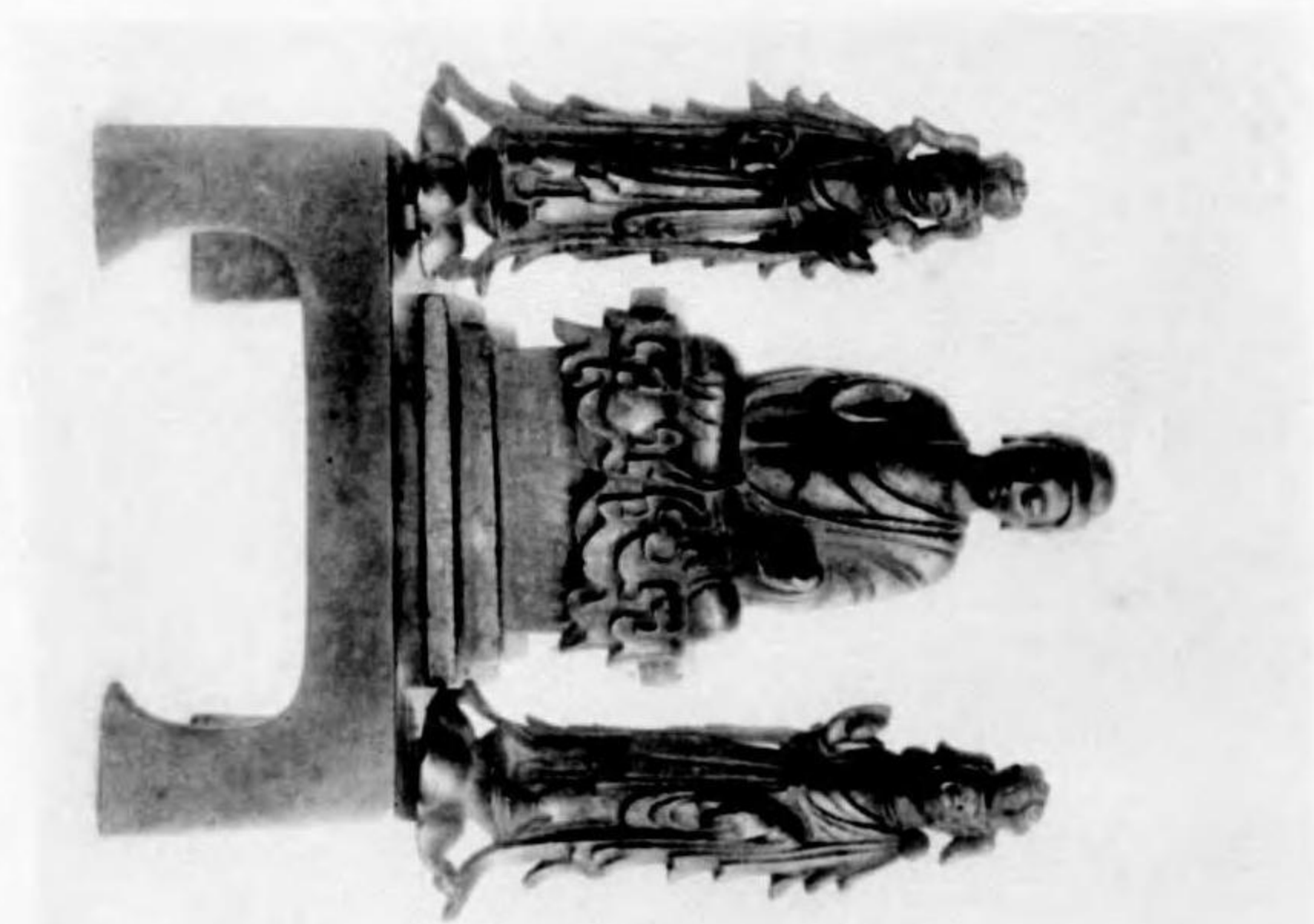
第三百五圖 十一面觀音板像

真大

第三百七圖 普賢板像

真大

東京 早崎德吉君藏



東京市立美術館蔵

第六

像百十圓 普賢菩薩

第六

像百五圓 十一面觀音菩薩

第六

像百六圓 文殊菩薩

東京市立美術館蔵

第六

像百四圓 萬字千手觀音菩薩

東京市立美術館蔵

第六

像百三圓 五尊聖母菩薩

第一百八圖 天和三年造老君石像

高一尺一寸三分

東京美術學校藏



漢百八闍 天師三斗雲多寶菩薩

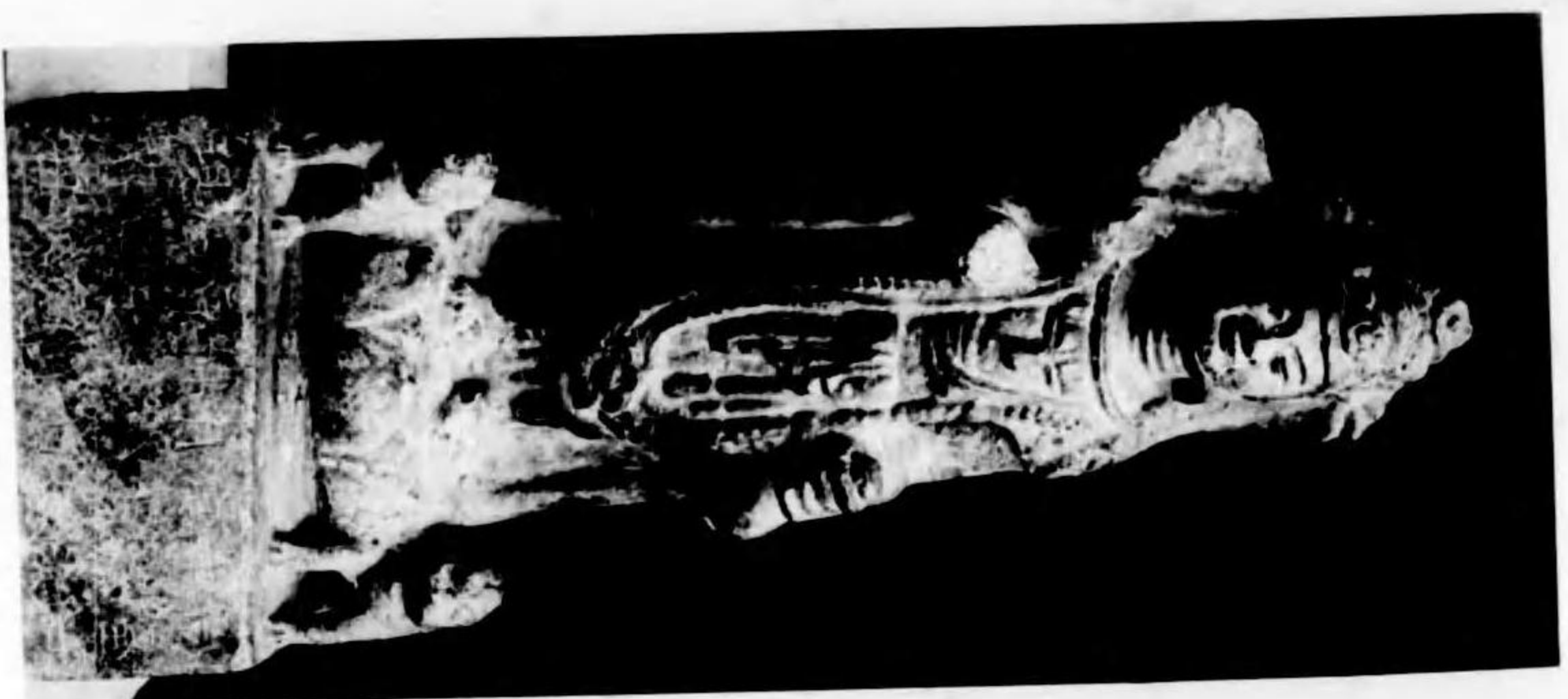
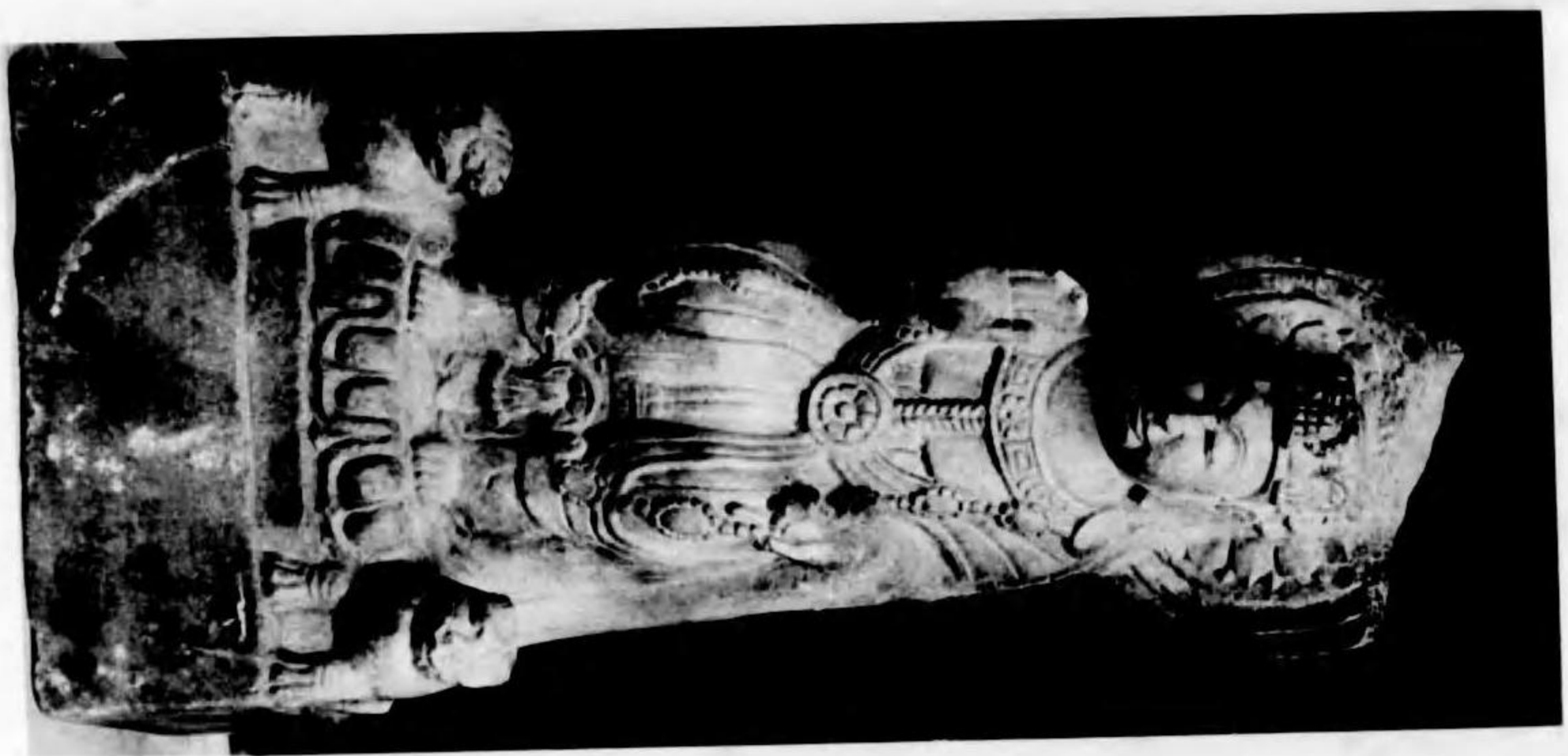
第一五二號

東京國立博物館藏

第九百圖 開皇三年造觀音石像
高七寸七分

第一百圖 觀音石像
高一尺二寸四分

第一百三圖 觀音倚像
高一尺三寸八分



第 一 五 三 号 像
第 百 三 十 三 号 像

第 一 五 四 号 像
第 百 三 十 四 号 像

第 一 五 五 号 像
第 百 三 十 五 号 像

第一百十一圖 觀音石像

高二尺五分

福岡伊弉傳右衛門右藏

第一百十二圖 觀音玉石像

高一尺三寸

東京早輪徳吉君藏



五百一十一號 彌勒菩薩

111111

1111111111

五百一十二號 彌勒菩薩

111112

1111111112

第十四圖 四神十二辰鏡

徑八寸二分

東京 竹內金平君藏



THE UNIVERSITY OF CHICAGO

LIBRARY

第一百五圖 四獸鏡

徑六寸二分

東京帝國大學文科大學標本室藏

第一百十六圖 鳥獸花文鏡

徑五寸六分

東京 竹內金平君藏



第一百七七圖 龍門鑼鼓洞本尊左挾侍菩薩像

第一百八圖 龍門鑼鼓洞本尊右挾侍菩薩像



第百一十圖 迦濕彌羅國所造之佛像

第百一十八圖 迦濕彌羅國所造之佛像

第一百十九圖 龍門奉先寺盧舍那佛左方挾侍菩薩像

東京 早稲田 吉田 寫真



第廿一號圖 龍仁寺石佛坐像(局部) 大正十一年

大正十一年

第百廿一圖 龍門奉先寺左方金剛像

第百廿二圖 龍門奉先寺左方天王像

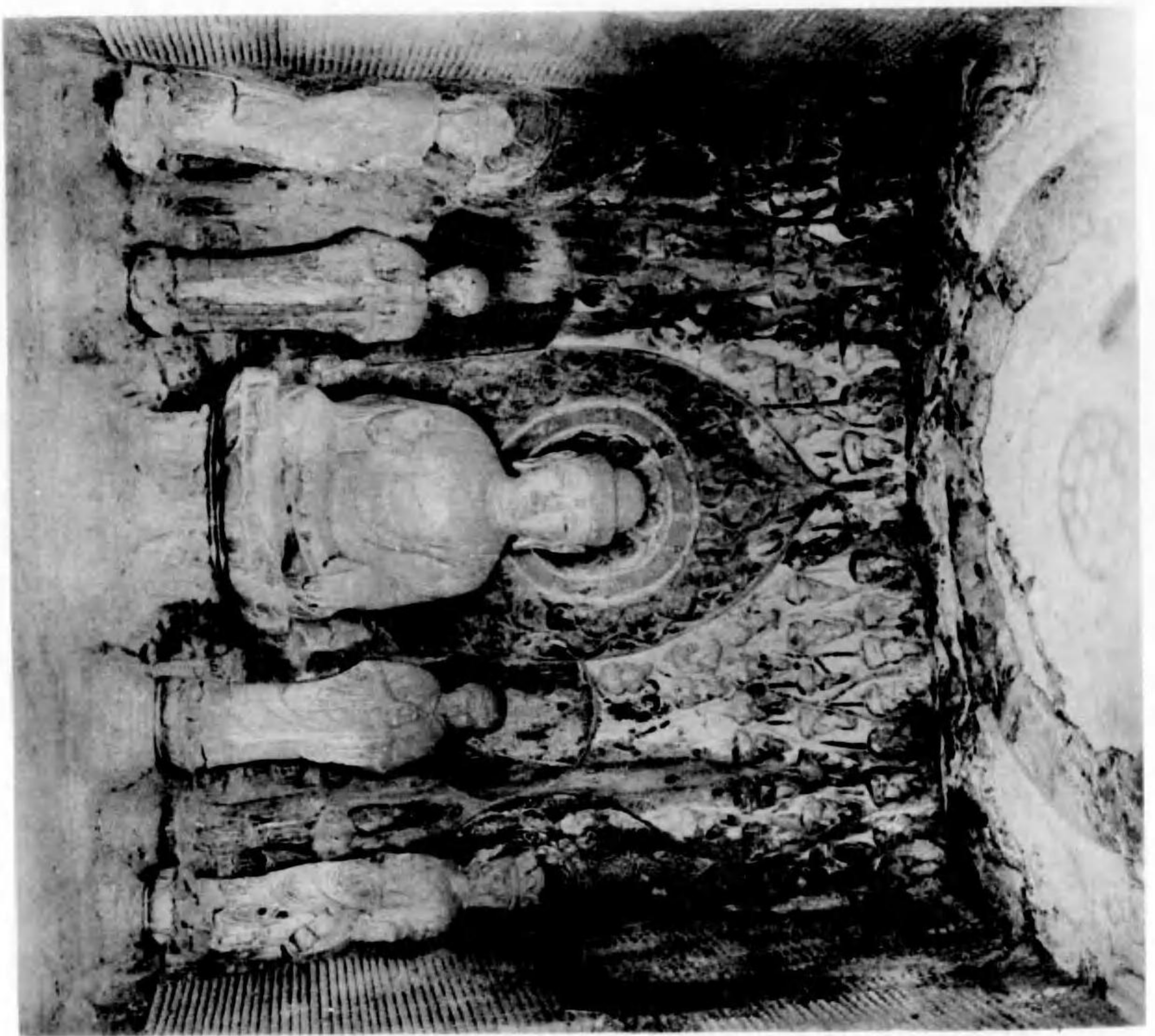


THE SEATED FIGURE

THE SEATED FIGURE

第五百廿三圖 龍門智運洞口獅子

第五百廿二圖 龍門智運洞諸像



BUDDHA SEATED

BUDDHA SEATED

第百廿五圖 伊闕香山寺第二洞佛像

第百廿四圖 伊闕香山寺第一洞佛像

東京 早稲田吉野寫真

第百廿六圖 伊闕香山寺第二洞挾侍菩薩像



第百廿五圖 明國會山石窟二佛對坐



第百廿四圖 明國會山石窟一佛對坐

第百廿六圖 明國會山石窟二佛對坐

...

第百廿七圖 燉煌千佛巖菩薩塑像

高二尺五寸

京都 本派本願寺藏



第百廿三圖 觀世音菩薩立像

高二尺五寸

東京 國立博物館藏

第百廿八圖 燉煌千佛巖聲聞塑像

高二尺五寸

京都 本願寺藏



像百廿八圖 釋尊于耨羅經圖中

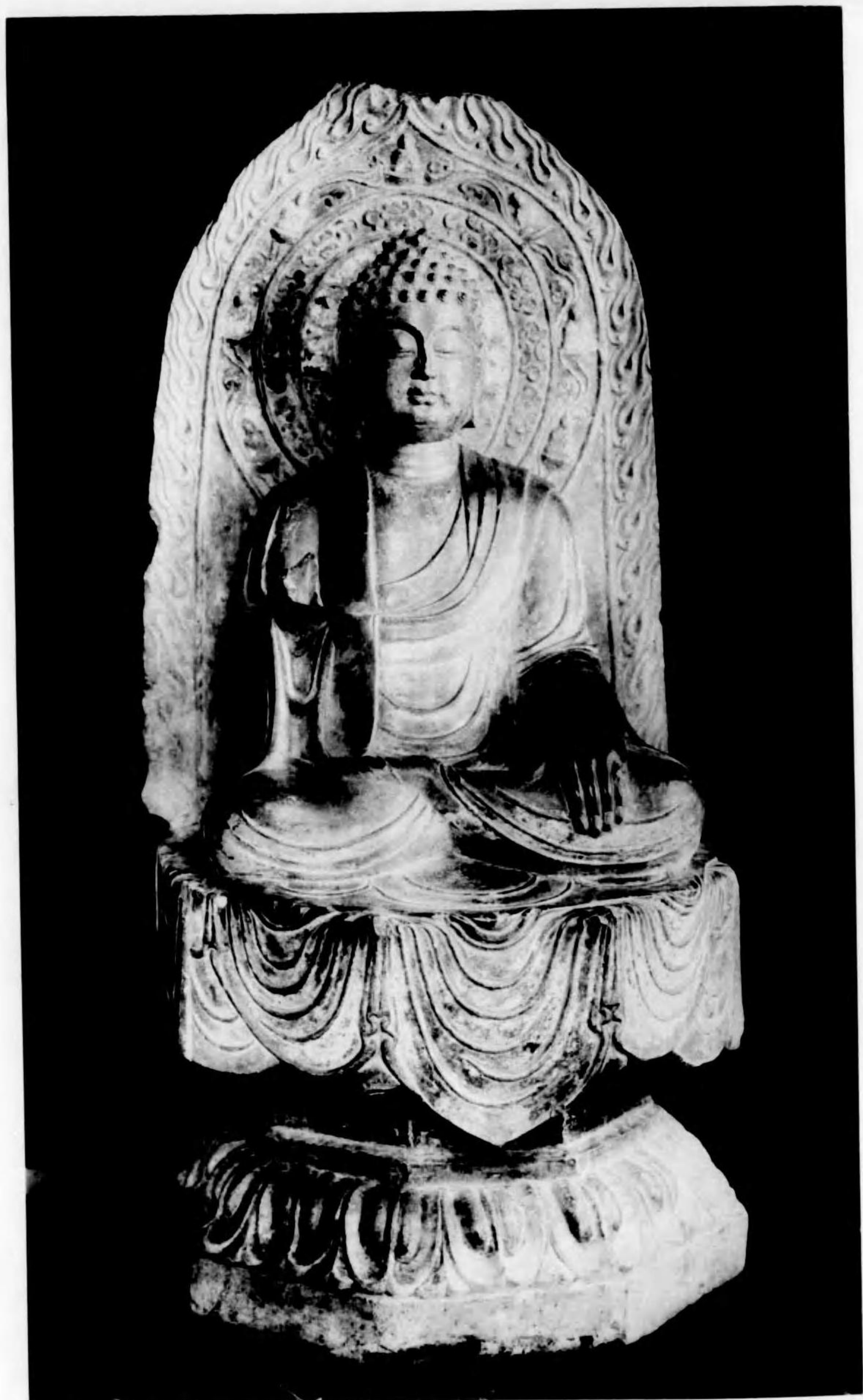
第二五五

大正十一年

第百廿九圖 貞觀十三年中書舍人馬周造佛青石像

高二尺七寸五分

東京 鈴木直三郎君藏



華嚴經疏 卷第十三 華嚴經疏 卷第十三

華嚴經疏 卷第十三

第百卅圖 總章元年造彌陀像

東京 早崎櫻吉君寫真

第百卅二圖 咸亨四年造二級石龜像

高一尺五寸五分

東京 黑田太久馬君藏



第百卅四圖 蘇寧元平靈藏石塔

東京 早稲田大学蔵

第百卅五圖 蘇寧元平靈藏石塔

第一頁五十五號

東京 早稲田大学蔵

第百卅一圖 咸亨三年造彌陀石像

高二尺四寸

東京 早稲田古石堂



佛牙舍利塔 佛牙舍利塔

佛牙舍利塔

佛牙舍利塔

第百卅三圖 儀鳳三年造彌陀五尊石像

高一尺六寸

東京 老田太文君藏



Figure 10. The central figure is seated in a meditative posture, surrounded by standing figures, all within an ornate, arched frame.

Figure 10. The central figure is seated in a meditative posture, surrounded by standing figures, all within an ornate, arched frame.

第百卅四圖 雍州同官縣武定村碑像

東京 早稲田吉野書院藏



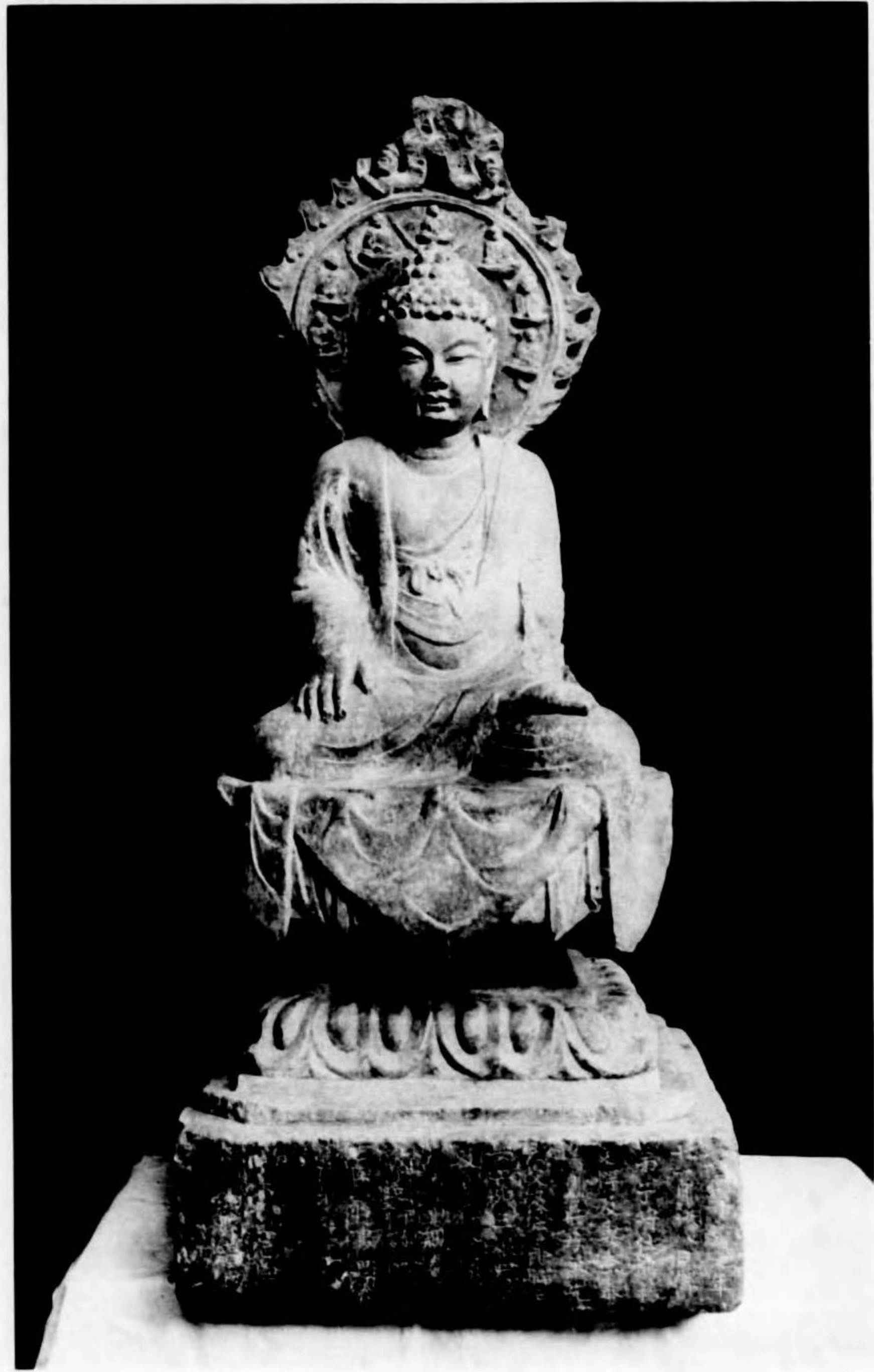
五百世相圖 樂地同官職 及 寺 特 刊 附

三 卷 一 百 一 十 一 頁

第百卅五圖 神龍元年造彌陀石像

高二尺五寸一分

東京 早稲田吉君藏



第百卅五圖 韓國元平張靈廟拜殿

高四尺七寸

東京國立博物館藏

第百卅六圖 景龍二年造彌勒三尊白玉石像

高七寸三分

東京 和田幹男君藏



佛世六圖 卷之二 佛世六圖 卷之二 佛世六圖

第百卅七圖 長安三年高延貴造彌陀三尊石像

高三尺六寸二分

東京 早稲田吉君藏

第百卅八圖 長安三年韋均造坐佛三尊石像

高三尺六寸

東京 早稲田書院藏



善吉祥之圖 其安三摩地經卷之三

三摩地經卷之三

第百卅九圖 長安三年蕭元春造彌勒三尊石像

高三尺六寸四分

東京 早稲田古書齋



THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS
1958

第四百十圖 長安三年李承嗣造彌陀三尊石像

高三尺六寸四分

東京 早稲田吉君藏



第百四十圖 高安二年奉教所刻石佛三尊像

第一百四十一圖 長安三年德感造十一面觀音石像

高三尺六寸上半身並示

東京 早稲田 觀音寺藏



第一百四十二圖 長安四年姚元景造彌勒三尊石像

高三尺六寸三分

東京 早稻田吉野原



Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through or a very light inscription.

第四百十三圖 十一面觀音石像

高三尺六寸

橫濱 原 富太郎君藏



第百四十三圖 十一面觀音菩薩

東京國立博物館藏

佛光大學藏

第一百四十四圖 十一面觀音石像

高三尺六寸五分 上半身を示す

東京 早稲田寺 石像



THE UNIVERSITY OF CHICAGO
MUSEUM OF ART AND ARCHITECTURE
1100 EAST 58TH STREET
CHICAGO, ILLINOIS 60637

第四百十五圖 十一面觀音石像

高三尺八寸上半身を示す

東京 早稲田 吉野庵



西千佛洞 西壁 佛龕 佛身像

第四百十六圖 開元十二年揚思勗造坐佛三尊石像

高三尺六寸五分

橫濱 原 富士郎君藏



佛氏第十代圖 第五十一卷 佛氏第十代圖 第五十一卷

第四百十七圖 馮鳳翼等造坐佛三尊石像

高三尺六寸

東京 早稲田古書堂



第百四十四圖 雲南大理崇聖寺三塔石壁

第三式六

雲南大理崇聖寺三塔石壁

第四百十八圖 坐佛三尊石像

高三尺六寸三分

東京 早稲田古書齋



佛身像 第三十四号

石造像

石造像

第四百十九圖 倚佛三尊石像

高三尺六寸三分

東京 早稲田 吉野 藏



新加坡川流館 藏 佛 教 造 像 碑 刻 卷 一

第 一 號

1911年

第一百五十圖 寶冠彌施三尊石像

高三尺六寸

東京 早稲田古物店

第一百五十一圖 坐佛石像

高一尺六寸

東京 早稲田吉野園



圖四十一 觀世音菩薩坐像

高九寸

藏經閣藏

第一百五十二圖 坐佛白玉石像

高二尺四分

東京 早稲田大学 藏



第一百二十二圖 坐佛白泥像

第二五號

東京 國立博物館藏

第一百五十三圖 地藏白玉石像

高一尺二寸一分

東京 早稲田吉君藏



第廿三圖 佛坐白蓮花

（MUSEUM）

東京國立博物館

第一百五十四圖 坐佛白玉石像

高一尺三寸五分

東京 早稲田古書齋



第百五十四圖 坐觀自在菩薩

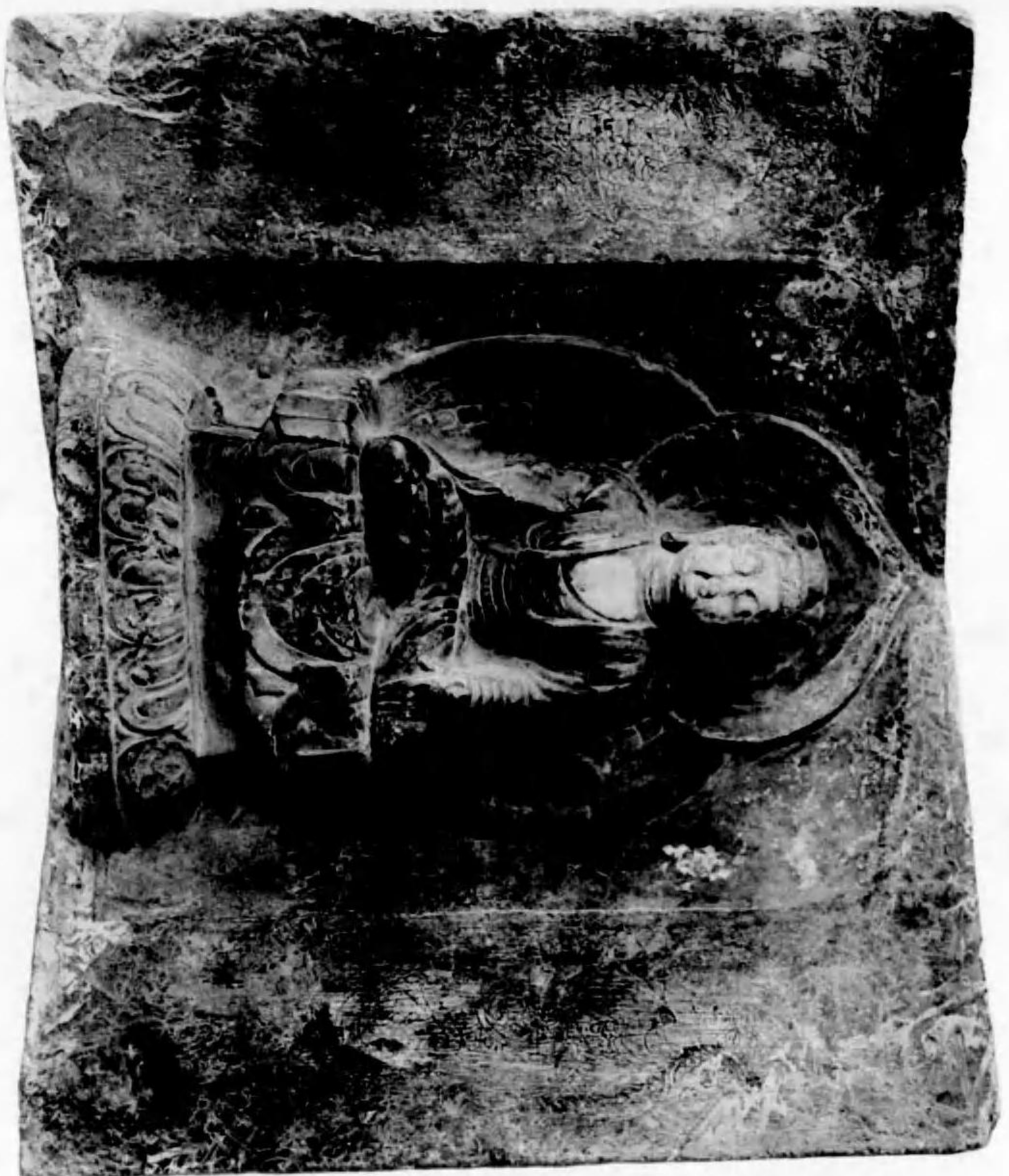
一〇五五

東京國立博物館藏

第一百五十五圖 釋迦白玉石像

高一尺三寸三分

東京 早稲田吉君藏



佛身于其座 慈願曰可也

第一百五十六圖 釋迦石像

高一尺一寸八分

東京帝國博物館藏



佛四十五六種 圖畫廿四

—————

第一百五十七圖 菩薩白玉石像

高一尺五寸四分

東京 早稲田吉君藏



第百五十四圖 菩薩白蓮淨相

高一尺五寸四分

東京 皇學館藏

第一百五十八圖 彌陀刹土檀龕梵本

高野山 金剛峰寺藏



藏經五十五卷一號之寶蓋
藏經五十五卷一號之寶蓋

第五百五十九圖 兼用虚空藏菩薩木像

第五百六十圖 金剛虚空藏菩薩木像

京都 觀智院 藏